



- 0. はじめに /Introduction 1-2
- 1. 本事業が目指したもの 3-4
- 2. 本事業の概要 5-9
- 3. プログラムの様子 10-12
- 4. 屋久島スクールで得た気づき 13-15
- 5. 気づき i-poster 16-25
- 6. 協働ワークの SDGs アウトプット 26-39
- 7. 学生達に気づきと勇気をもたらした屋久島における「木を見て森も見る」 SDGs 思考養成実践モデル事業 40-49
- 8. エッセー 1 SDGsSchool in Yakushima を通して 50
- 9. エッセー 2 ユネスコ屋久島プログラムに参加して 51
- 10. エッセー 3 気づきの思弁と花弁 52-53

はじめに

寶 馨(ユネスコチェア WENDI チェアホルダー、京都大学大学院総合生存学館学館長・教授)

令和2年度文部科学省ユネスコ活動費補助金(SDGs 達成の担い手育成(ESD)推進事業)の支援を受けて京都大学で実施した「屋久島における「木を見て森も見る」SDGs 思考養成実践モデル事業」は成功裡に終えることができた。本事業は、京都大学ユネスコチェア WENDI が主体となって、SDGs 実現のための行動変容への道筋をつけることを目指し、自然・社会・人間システムを俯瞰する(木を見て森も見る)思考力・協働デザイン力・実践力を養成する「ユネスコ SDGs スクール in 屋久島」を大学生および院生を対象に約半年にわたって実施した。それを土台に国内外向けに SDGs 達成担い手育成モデルを確立することを趣旨とした。

京都大学内で公募した「ユネスコ SDGs スクール in 屋久島」には、176 名の学部生、大学院生からの応募があった。応募書類として課した志望動機書を審査して 20 名を選抜した。最終的にはコロナ禍の影響で京都と屋久島をオンラインで中継することになったが、当初の目的を果たすべくプログラムの充実を図った。9月11日~15日に屋久島を題材として、ビデオや写真を活用することによって、森・里・海の連環を感じ、人・社会・自然の相互作用の中に持続可能な開発の意義を見出そうとするサマープログラムを実現した。オンラインに切り替えために 60 名以上が参加することが可能になり、最終的に 44 名の学生が全ての工程を終えて修了書を手にした。

さらに、そのフォローアップの国際フォーラムを 1月 21日に京都大学大学院総合生存学館において行い、SDGs 担い手を養成すること及びレジリエントな社会の構築の意義を議論した。この国際フォーラムには、ユネスコジャカルタ事務所から杉浦愛プログラムスペシャリスト、ユネスコ MAB(人間と生物圏)委員会元委員長 Enny Sudarmonowati(インドネシア科学院(LIPI)、京都大学大学院農学研究科客員教授)、ポツダム応用持続可能学研究所 Ilan Chabay 氏(米国人で京都大学防災研究所客員教授)、岡田憲夫氏(京都大学名誉教授)、JX 金属株式会社菅原静郎氏(取締役常務執行役員)、国連大学サステナビリティ高等研究所野口扶美子氏(ESD プログラムリサーチ・フェロー)、Vincent Tong氏(ノーザンブリア大学准教授)の参加を得た。

屋久島は、ユネスコが指定する世界遺産であると同時に生物圏保存地域(ユネスコエコパーク、Biosphere Reserve)であり、その持続的な保全と住民との共生は、SDGs を担う若手人材の育成のために格好の場を提供してくれた。新型コロナウィルス感染症の拡散の状況下にもかかわらず、本事業に積極的に協力された屋久島在住の方々、屋久島学ソサエティーの学会員の皆様のご協力にも深謝する次第である。意義深い本事業を支援された文部科学省にも厚く御礼申し上げたい。

2021年2月京都にて

Introduction

Kaoru Takara (Chairholder, UNESCO Chair WENDI, Dean and Professor, Graduate School of Advanced Integrated Studies in Human Survivability (Shishu-kan), Kyoto University)

I am very pleased to report that we successfully concluded the 2020 UNESCO SDGs School in Yakushima, a project entitled "Enhancement of thinking ability towards implementation of SDGs by 'Looking at Nature, Humans and Societies in a Continuum' in Yakushima" with a financial support by a MEXT UNESCO fund for encouraging young generation who promote the United Nations Sustainable Development Goals (SDGs). The Kyoto University UNESCO Chair WENDI organized this school project for a half year aiming to promote the initiation for undergraduate and graduate students to think about change of action for realizing SDGs and to obtain abilities to think, co-design and practice in real problems by looking over natural-social-human systems (Looking at Nature, Humans and Societies in a Continuum). Based on the experience in this project, our objective is to establish a model for nurturing young generation who contribute to accomplishment of SDGs, applicable to both within and outside Japan.

The number of students who replied with their own written statement to the announcement to this 2020 UNESCO SDGs School in Yakushima was 176 from undergraduate and graduate schools in Kyoto University; we selected 20 excellent students by evaluating their statements. Although we made best efforts to bring all the 20 students to Yakushima, the COVID-19 situation didn't allow us to do so. Consequently, we changed it as an on-line school connecting Kyoto with Yakushima so that we could receive more students including the firstly selected 20 students. The school was implemented during 11th to 15th September 2020 in Yakushima where a number of local people, a photographer and several professors joined as speakers or coordinators, while other professors and more than 60 students joined from Kyoto or their homes. Making use of videos and photos, the school provided reality of the connectivity of mountain forests, villages and oceans to find out the significance of sustainable development considering interaction among human, communities and nature. Finally, 44 students completed all the school requirements and obtained the certificate.

On 21st January 2021, at the Graduate School of Advanced Integrated Studies (GSAIS) in Human Survivability (Shishu-kan), we also organized an international forum as a follow-up event of the Yakushima school to discuss the significance of nurturing young generation who contribute to SDGs and establishment of resilient society. In this forum, even under worse condition of COVID-19, we were fortunately able to invite a number of international participants such as Dr. Ai Sugiura (Programme Specialist, UNESCO Jakarta Office), the former Chairperson of UNESCO-MAB Dr. Enny Sudarmonowati (Indonesian Academy of Science (LIPI); currently Visiting Professor, Graduate School of Agriculture, Kyoto University), Dr. Ilan Chabay (Professor, Institute for Advanced Sustainability Studies, Potsdam, Germany; currently Visiting Professor, Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University), Dr. Norio Okada (Emeritus Professor, Kyoto University), Dr. Shizuo Sugawara (JX Nippon Mining & Metals), Dr. Fumiko Noguchi (United Nations University), Dr. Vincent Tong (Northumbria University).

Yakushima is a World Heritage site as well as a Biosphere Reserve designated by UNESCO, where people are living with them considering sustainable conservation and development of the island. It provided us with an excellent field for the school to nurture students who will contribute in some way to the SDGs. I very much appreciate people in Yakushima, members of the Yakushima Society, colleagues of Kyoto University for their kind and thoughtful cooperation even under such a difficult situation of COVID-19, as well as the Ministry of Education Culture, Sports, Science and Technology of Japan (MEXT) for their financial support to this important project.

Kyoto, Japan, February 2021

1.本事業が目指したもの

清水美香 (京都大学総合生存学館特定准教授)

本事業の趣旨

SDGsの目標群全体を俯瞰すると、(1)自然界と人間社会に関わる諸課題が複雑に絡んでいること、(2)それらは人間の日常の暮らしや経済活動に密接に関わっていること、(3)その諸課題は自然界及び人間社会に短・中・長期的に深く広範囲にシステミックな影響をもたらすものであることが指摘できる。こうした特徴を有する諸課題を克服していくには、人間社会を原点として、自然・人間・社会システムを俯瞰した視点から、そのシステムに関わる様々な繋がった課題をシステミックに捉えて、人間及び社会の行動自体に変容効果をもたらすような取り組みが必要である。このことは、「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム(GAP)」で目指しているもの、特に「ESD for 2030」に基づいた施策の中で強調されているような 1)「行動の変革」「構造的変更」に直接的、または間接的に関わるポイントでもある。一方で、こうした行動の変革、構造的変更は、容易に可能になるものではないし、そのための方法論、アプローチはこれまでに具体的なものが提示さてこなかった。

この事業は、そのポイントに焦点を当てた。特に上記(1)(2)(3)に関連して、「木を見て森も見る」アプローチを根底に据え、SDGs の目標群間の関係性を捉えることを重視し、京都大学 UNESCO チェアの特別プログラムとして、自然・社会・人間システムを俯瞰する(「木を見て森も見る」を持続可能な社会に当てはめた考え方)思考力・協働デザイン力・実践力を養成するプログラムを大学生・大学院向けに実施した。それを土台に、国内外向けに SDGs 達成担い手育成モデルを目指した。



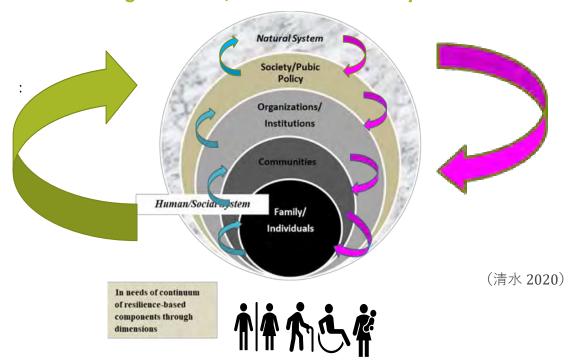
Photo by Kazuya Yamaguchi

木を見て森も見るとは

もともと「木を見て森も見る」は、いわゆる「システムズアプローチ」から派生している(清水 『協働知創造のレジリエンス』2015)。システムズアプローチは、平易にいえば、システムは単独で は機能しない、システムとシステムが連動してこそ、全体のシステムが機能することを意味する。こ れを、さらに「持続可能な社会」という文脈に当てはめるとどのようなことが言えるだろうか?

まず基本的なことであるが、実践では忘れがちなことは、人間・自然・社会システムは、それぞれが相関関係にあり、切り離して考えられないということである。SDGsについても、人間・自然・社会それぞれに関わるものが散らばっているが、実際にSDGsを実現しようと思えば、どのゴールに焦点を当てようとも、人間・自然・社会を俯瞰的に見ることが必要条件になる。それに関連するのが、下記のようなダイアグラム図である。この図は、本事業内で行われたセッションやフォーラムで、SDGsの実施を考える上での根底となる考え方として提示された(詳細として、関連の思考方法・見方・アプローチを分かり易く敷衍するため「ナラティブビジュアルブック」も作成)。

Looking at Nature, Humans and Society in a Conti



場とプロセスのデザイン

本事業を推進するにあたって、「木を見て森も見る」を体感し、実践していくために、その概念に通底した場とプロセスのデザインを行った(その全体像は、次項「本事業の概要」を参照いただきたい)。そのデザインの一環で、1)国籍・年齢・宗教・性別・専攻・関心の違いを超えた多様性を重大切にすること、2)自分が持っている「鎧(よろい)」や先入観を一旦横におき、自然との繋がりを体感できるような「場」に身を置くこと、3)現場での経験を自分の周囲に当てはめること、4)5感、コミュニケーションを大切にすることを重視した。

2.本事業の概要

清水美香(京都大学)

本事業(プログラム)の流れ

オリジナルの構想では、屋久島でフィールドワークや協働ワークショップを中心にセッションを実施する予定であったが、コロナ感染症の状況を踏まえ下記1.2のセッションに再構築し、実施した。

- 1. UNESCO SDGs Yakushima(屋久島) Online School: September 11-13, 2020.
- 2. UNESCO SDGs Collaborative Workshop @Seifuso, Kyoto, Kyoto: September 15, 2020.
- 3. International Forum @Kyoto University(京都大学):January 21, 2021.

上記 1. については屋久島と京都を中継し(以下、屋久島オンラインスクール)、 2. についてはもともと選抜されていた 20 名の学生を、美しい日本の伝統的な建造物と庭園がある清風荘に招待し、リトリートプログラムを兼ねたチームプロジェクトを行うべく、屋久杉の天井のある和室の空間も利用した協働ワークショップを開催した。いずれについても、当初の本事業の趣旨、特に「木を見て森も見る」を柱に据えたプログラムに再構築することに注力した。それぞれの詳細の概要については、下記 $1\sim3$ をご覧いただきたい。

1. 屋久島オンラインスクール (September 11-13, 2020)

SDGs Yakushima School Online Program Overview

Goal: Through Yakushima, we aim at (i) lowering "walls" within and around us, (ii) grasping linkages among nature, society and humans, (iii) reflecting ourselves, and (iv)connecting insights drawn through the Program (which focuses on "looking at trees and forests in a continuum") to how to approach for SDGs. 「屋久島」を通して、(ア) 自分自身の中および周りにある鎧(よろい)を一旦おろし、(イ) 自然と社会と人間との繋がりを捉え、(ウ) 内省し、(エ) 「木を見て森も見る」プログラムから得られる気づきを、SDG s への今後のアプローチに繋げる。

Schedule (Connecting Kyoto-Yakushima 京都と屋久島を中継)→屋久島環境文化村センター

DAY1

Grasping Holistic View beyond Boundaries/

11th

境界線を越えて全体を捉える

(Fri.)

Opening—Goal of UNESCO Yakushima

UNESCO 屋久島スクールが目指すもの GSAIS, Kyoto Univ. Associate Prof. Mika Shimizu 総合生存学館 清水美香 特定准教授

- · About the School 本スクールについて
- ・Message 挨拶-Dean of GSAIS and Kyoto Univ./ UNESCO Chair Holder, Prof. Kaoru Takara 総合生存学館長/京大 UNESCO チェアホルダー寶馨教授
- ・Introduction of Staff スタッフ紹介
- ・Check-in & Survey チェックイン&アンケート

Yakushima "Light Year" 屋久島「光年」

Artist, Kazuya Yamaguchi 美術家 山口和也さん

Yakushima Briefing 屋久島ブリーフィング

Director of Primate Research Institute, Kyoto University/President of Society of Yakushimaology, Prof. Takakazu Yumoto 京都大学霊長類研究所長/屋久島学ソサエティ会長、湯本貴和教授

Yakushima Island Note and Homenaje Project- Let People Return to Forests ヤクシマノオトと人を森へ帰すオメナヘプロジェクト

Yakushima Eco Festa Director, Takuya Takuya 屋久島エコフェスタ代表理事/田平拓也さん。

Yakushima Town, Life and Industry 屋久島のまちと暮らしと産業

- ・Overview 概要- Yakushima Town, Sightseeing and Town Planning Section Chief, Koji, Kihara 屋久島町役場 観光まちづくり課統括係長(地域振興担当) 木原幸治さん
- ・**Ecotourism エコツーリズム-** President of Ynac, Takeshi, Matsumoto(有)屋久島野外活動総合センター代表取締役 松本毅さん
- ・Yakushima and Economy 屋久島と経済- Director of Ynac, Hiroshi, Ohara(有)屋久島野 外活動総合センター 取締役営業部長 小原比呂志さん
- ・Interviewer: Science writer, Ayumi Kojima 小島あゆみ(サイエンスライター)
- · Dialogue 対話

"Looking at Trees and Forests in a Continuum"「木を見て森も見る」Associate Prof. Shimizu 特定准教授、清水美香

Learning "linkage", "boundary", and "looking at trees and forests in a continuum" perspectives or systems approach through Yakushima to connect the perspectives to SDGs . 屋久島との関わりの中で、「繋がり」、「境界線」、「木を見て森も見る」思考を学び、その観点を SDG s に繋げる。

Interactions & Reflection

DAY 2 Grasping Details through Relationships/関係性から詳細を捉える

12th Linkages

Linkages in Nature in Yakushima

(Sat.) 屋久島における自然の中の繋がり

- ・10:00-10:30 Through Yakushima Ocean Views 屋久島の海の映像から GSAIS,
- Prof. Yosuke Yamashiki(総合生存学館 山敷庸亮教授)
 10:30-12:00 Mini-Lectures by Experts 専門家ミニレクチャー
- -Prof. Yumoto/Prof. Yamashiki/Prof. Mamoru Kanzaki (Agricultural Department)/ Assoc. Prof. Hideki Sugiuwa (Wildlife Research Center)

湯本教授・山敷教授・神崎護教授(農学研究科)・杉浦秀樹准教授(野生動物究センター)

Implications of Linkages in Nature in Yakushima for Human Society

屋久島の自然の循環 から人間社会へのインプリケーション

- ・Dialogue 1 Among Experts 専門家間で
- -Prof. Takara, Prof. Yumoto, Prof. Yamashiki, Prof. Kanzaki and Prof. Sugiura 寶教授、湯本教授、山敷教授、神崎教授、杉浦准教授

• Dialogue 2 Experts X Students 専門家 X 学生

History in Yakushima: Humans and Natures

屋久島の歴史:人と自然 Tomoko Furui 古居智子さん(Writer 作家)

- · Talk トーク
- · Dialogue 対話

Case of Forestry- Inside and Outside, and Past-Present-Future-

林業を事例として一内と外、そして過去・現在・未来一

- ・History of Forestry in Yakushima 屋久島の林業の歴史
- -Tabira, Takuya Tabira 旅楽 田平拓也さん
- · Forestry In and Outside of Japan 日本と海外の林業
- -Channel Original Inc. President, Hidenobu Ieyama

チャネルオリジナル株式会社 代表取締役社長 家山英宜さん

- ・Forestry of Jisugi (cedars planted by humans after the second world war):Current State and Future 屋久島の地杉林業の現状とこれから
- -Yakushima Jisugi Processing Center, Inc. Manager, Hiroyuki Toki 株式会社屋久島地杉加 エセンター 事業統括マネージャー 時寛之さん
- · Dialogue 対話

17:00 - 17:15 Reflection

DAY 3

Grasping Nature, Humans and Societies in Continuum for SDGs/

自然・人間・社会を連続的に捉え SDG s へ

(Sun.)

13th

Circulation through Water Session and Dialogue

水の循環セッションと対話

Tokyo Intitute of Technology Prof. Tamio Nakano 中野民夫 東京工業大学教授

SDGs Dialogue: Gaps and Collaboration SDGs 対話―ギャップと協働 Prof. Kanzaki X Prof. YumotoX Prof. Nakano X Assoc. Prof. Shimizu X Students 神崎教授×湯本教授×中野教授×清水准教授×学生

Sharing Insights and Collaborative Works

気づきの共有と協働ワーク

- 1) Finding and discover different linkages at various scales in Yakushima
- 2) Sharing" insights" among others
- 3) Applying learnings from Yakushima, and connect it to our social or future perspectives (from SDGs perspectives)
- 4) Communication and Dissemination
 - Summarize your insights in one-page i-poster as "Insight Note"
 - Excellent "Insight Notes" will be presented at the upcoming international workshop in Kyoto University on December
- 1)「木を見て森も見る」を屋久島の中に見出す、発見する
- 2)「気付き」を共有する
- 3)屋久島での学びを自分たちの周囲に適用する、また社会・未来への考え方、見方に繋げる(SDGs との関わりの中で)
- 4)コミュニケーションを通して伝える、発信する

-気付きを Insight Note として 1 枚紙 i-poster にまとめ、発表。その後、集約し「Insight Note」としてオンラインで公表。

Reflection 3/ Closing

2. 清風荘における協働ワーク (September, 15, 2021)

屋久島オンラインスクールの成果を踏まえて、清風荘で次に焦点を当てた協働ワークとセッションを 実施した。

- 屋久島オンラインスクールで得た経験、知識、自分たちのチームプロジェクトとして SDGs への取り組みを協働で構想
- 実現プロセスを検討し、実践に繋げる。
- 屋久島オンラインスクールの中でキーワードにあげられた「内省」「あいだ」「繋がり」の学 びのための特別セッションとして、「天空の茶室」を実施する。

★なお、この後のチームワークは、2021 年度 1 月 21 日開催の国際フォーラムの前日まで、継続的に行われ、教員のガイダンスを踏まえて「振り返り」が行われた。そのようにして、チームプロジェクトは更新され、磨いていく「プロセス」がつくられた。

3. 国際フォーラム (January 21, 2021)

International Forum Overview

Goal: 屋久島オンラインスクールおよび清風荘での協働ワークを経て、半年間協働グループワークに取り組んできた学生による SDGs のための取り組みの発表を軸にしながら、関連の思考と視点を核にした人材育成プログラムが SDGs イノベーターを育成する上でどのように貢献し得るか、SDGs 実施にどのように繋げることができるかを検討することを狙いとした。各学部・研究科の枠を超えて全学的に学生・教員・実務家が一体となって対話型のフォーラムを通して、SDGs 実施に向けて具体的な歩みを進めることを目的に開催した。

Introduction

Dialogue: What is "Grasping Nature, Humans, and Societies in a Continuum? Relevance to SDGs? Mika Shimizu / Norio Okada / Ilan Chabay with other panelists

★「木を見て森も見る」と SDG s との関係を現在の SDGs 実施状況を踏まえた上で紐解く。

SDGs Collaborative Student Projects

Graduate/undergraduate students across Kyoto University (selected participants in UNESCO Yakushima School) with commentators

★UNESCO 屋久島スクール選抜組の SDGs 協働プロジェクトの発表

Group Presentation 1:

Title: "どこから、どこまで (From Where to Where)"

by Eileen Magero (School of Agriculture, M1), Ling Tong (School of Science, D1).

Group Presentation 2:

Title: "The Whisper of the Forests Summer Program"

by Dinh Thi Thuc Vien(School of Global Environmental Studies, M2), Soumya Basu(School of Energy Science, M2), Ayame Ishida(GSAIS, D1), Yuzuka Saitoh(Faculty of Letter, B1).

Group Presentation 3:

Title: "A Platform to Support Technical Trainees in Japan"

by Pote Leo(School of Global Environmental Studies, M2), Xu Cong(GSAIS, D3), Kay Khaing(Graduate School of Management, M2), Akihide Takatsuji(Faculty of Agriculture, B1), Soyaka Okamura(Faculty of Agriculture, B2)

Outstanding Nature of Yakushima Island - River, Forest and Ocean

Yosuke Yamashiki/ Mamoru Kanzaki with Ph.D. candidate

*実際に屋久島を歩いて潜って調査した映像を交えて、森林・河川・海洋の繋がりを中心とした独特の 自然環境について考える。

How can Resilience Approach address SDGs?

Graduate School Students across University in WENDI Resilience Course with commentators

★WENDI レジリエンスコースの学生による個別プロジェクトの発表

Porte Leo (Graduate School of Global Environmental Studies, M2)

Title: "Practices to create resilience in a Japanese marginal villages: Case study of Senjo in Ehime Prefecture"

Bruno Ribeiro (Graduate School of Advanced Integrated Studies in Human Survivability, D3)

Title: "Collaborative Approach for Commons: Case of Sugarcane Bagasse Concrete in Okinawa"

Wazaq Raza (Graduate School of Engineering, M2)

Title: "Resilience-Based Policy Framework to Address the Toxic Smog in Lahore Pakistan" Haissam Khan (Graduate School of Management, M2)

Title: "Applying Insights drawn from Yakushima School to University Community Efforts with SDGs

Masako Ichihara (Graduate School of Global Environmental Studies, D3)

Title: "Cardboard Compost as a resilience practice toward sustainable waste management" with a guest, Chuck Kayser, MIDORI FARM

Dialogue Forum: How Can We Accelerate SDGs Implementation Through SDGs Innovators?

All panelists with participants

*10 年後までに SDGS を「実施」するための具体的な行動とそれを可能にする教育・人材育成プログラム・機会について総対話

Closing

Kaoru Takara

3.プログラムの様子



◀コロナ禍でのオンライン決定後の 屋久島と京都をつなぐ準備開始- 屋久島からの贈り物

写真:土田亮

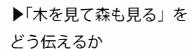




写真:山口和也



■屋久島地杉(30~60 年生の 植林木)の魅力を聞く

写真:山口和也



▶美しい風景の中にある ゴミ風景

写真:山口和也



- ◀清風荘で人と人の間、境界線を 体感
 - 天空の茶室

写真:山口和也

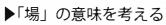






写真:土田亮



◆静けさの中で普段目に見えない もの、聞こえないものに触れる

写真:土田亮



▶「協働」とは

写真:山口和也

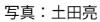


◀「一瞬」を大切にする

写真:土田亮



▶国籍・年齢・宗教・性別・ 専攻・関心の違いを超えた多様性





◀協働から生まれるもの

写真:山口和也

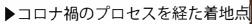




写真:土田亮

4屋久島スクールで得た気づき

This program gave me the opportunity to look at something from larger perspectives. I have been apt to focus on just one factor, but, from now, I am convinced that I can put emphasis on more causes of a certain phenomenon.

What influenced me the most is that we should think and see surroundings in a linkage.

By finding the missing links and thinking how to overcome it, we can learn what we can't see when we see individually.

私の専攻自体は心理学であり、生態学や地理学などを必要とする環境問題や SDGs にはあまり関係ないと思っていました。本プログラムでは、人一社会一自然のつながりと見えないつながりについて考え、特に私は自然や社会についての知見・興味と人(生活)に対する知見・興味の間のギャップ(不均衡)に着目しました。その中で人文学や人文・社会学の必要性を感じ、自身の専攻分野である心理学がどのように環境問題、SDGs に貢献できるかが少し理解できたように思います。

Through this program, I learned one important thing that if I were to work on 17 SDG goals separately, one SDG improvement might have negative impact on the another one as they might be conflicting each other. Thus, the most important thing is to consider from every aspect of SDGs if we are to implement any idea.

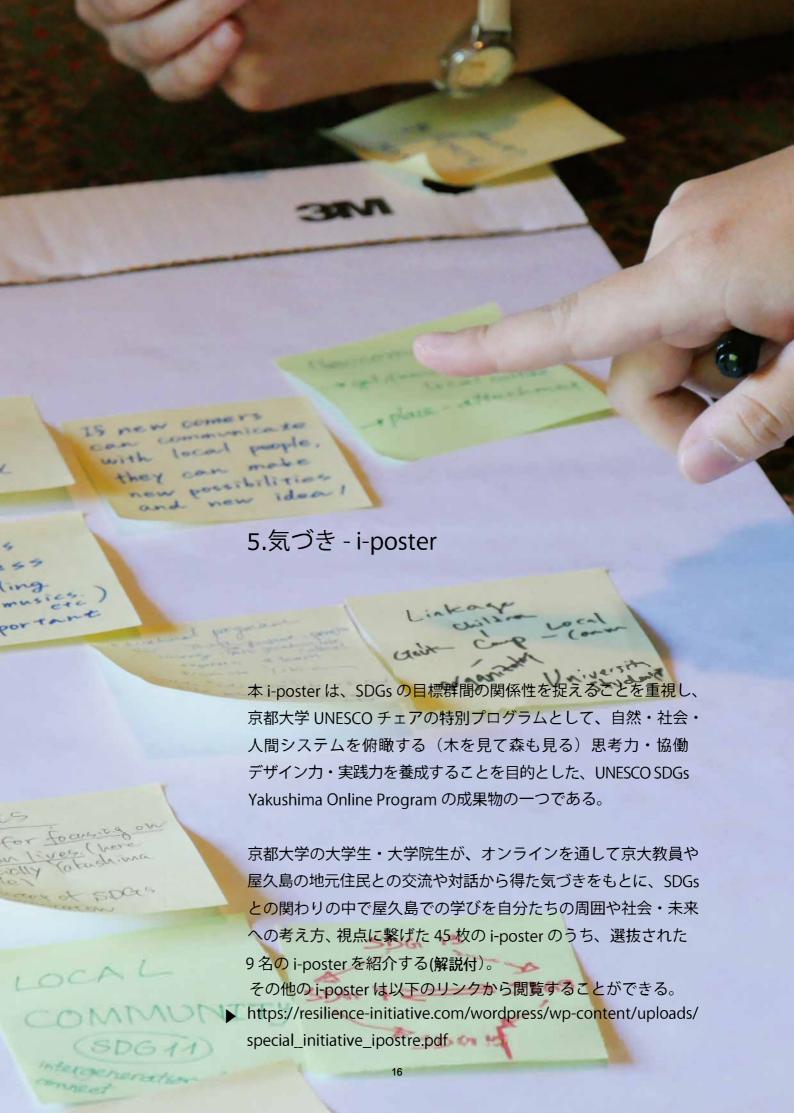
After seeing the picture of Yakushima with a lot of plastics disposed of in the forest, this made me want first to reduce the amount of plastic I generate, and later I'll try not to use disposable plastics anymore. It was a shock to me to see such a valuable place covered in plastic.

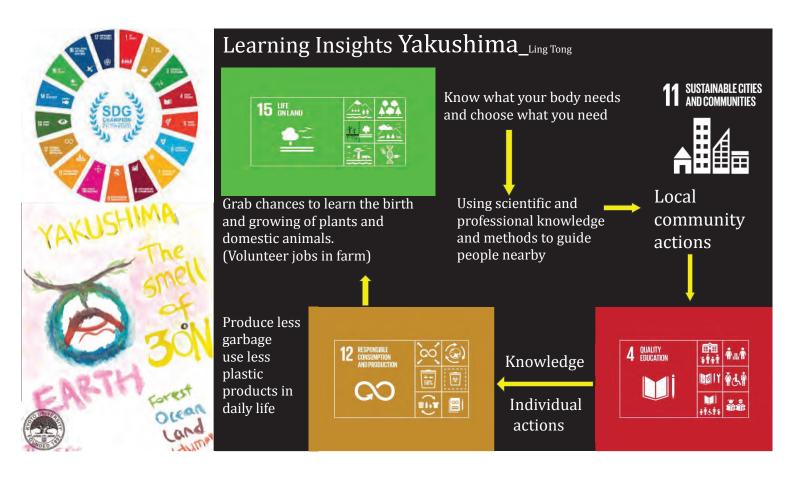
First, because I'm in a department of forest science and I've been to Yakushima, I think I already know what Yakushima is. However, as listening to many talks, I realize I saw one single aspect of Yakushima (that is " 木を見て森を見ず ") before the program. That's experience makes me find " 木を見て森も見る " mind. In addition, there are many various students who have different opinions. Interacting with those people was a valuable experience for me. I want to try " 木を見て森も見る " mind and create many ideas for one thing from now.

高校でも英語のプログラムに参加していたが、お客様扱いされていたんだなと分かった。 このプログラムでは、全員が対等で一人一人の意見が求められていて、覚悟が全く足りて いなかったなと思った。でも、年齢も専攻も違う方たちの意見(半分くらいしか理解できて いないかもしれないが)は興味深く、それに対し拙い英語で賛成したり反論したりするのは とても楽しかった。次は自分の意見を堂々と述べられるように、英語を上達させテーマへの さらなる理解と共に臨みます。

One of the most important things I experienced in the seminar is the application of both art and science in sustainability. With the lectures in this seminar, I found the power of art in sustainability - see the piano concert in the forest! I actually have attended some concerts like that before - and really enjoyed them, but art didn't usually come to my mind when we are talking about sustainability "seriously".

Before joining the program, I thought SDGs is able to be separated into two parts, science or technology parts and social or politics part. For example, protect environment is the target for scientists but solving gender problem should be addressed by politicians or social scientists. However, in this program, I realized it is wrong. Environment and nature is necessary for all people even who is not major in biology or ecology. That is because human being is part of nature and human, animals, fishes, plants, bugs, and any other creatures essentially connect on the earth.



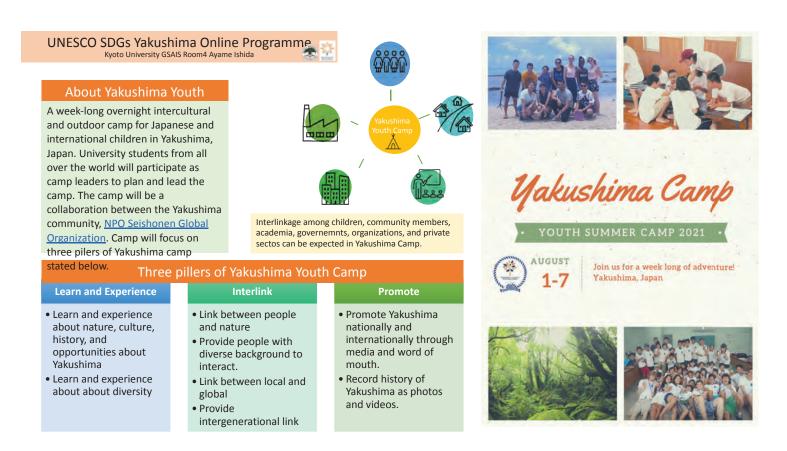


Yakushima is a small round-shape island in the ocean.

Different eco-systems here form the basic natural living space for different living creature including human beings. Ocean and Land, Forest and Soil, People living here has no boundary with other parts of nature and know how to be harmony with nature, which should be an epitome of the earth!

But when it comes to space we are living now, e.g. the big cities, the well- developed industrial areas, it should be boundary for human to protect, to behave and to obey rules!

The life style in Yakushima could be simulated in our own communities to make a better environment!



Brief Explanation

 UNESCO SDGs Yakushima Online Programme has led me to the idea to start Yakushima Youth Camp. There are beautiful nature and culture in Yakushima to share with the world. It would be great if we can provide a platform for youth to visit Yakushima so they can share their experiences to the world.



- Forest Plan is a crowdfunding program as well as a lifestyle improvement program for Yakujisugi replantation.
- This plan aims at **1)combining** low-carbon lifestyle and traveling style with Yakujisugi replantation, and 2) building and keeping **a long-term connection** between people (including local people and visitors) and Yakushima.
- Everyone who lives in or visits Yakushima can get a WeYaku Account on a certain website or a smartphone application.
- An account holder can earn points through their pro-environment behaviors, such as volunteering to collect garbage in Yakushima and donating for Yakushima environment management. An account holder can adopt (or connect to) a Jisugi seedling with a given amount of points; he or she can name this tree and receive messages or gifts from Yakushima.

We come from nature.

Trees and forests provide us refuge;

Ocean and rivers supply us with food and energy.

We absorb all the nutrients of nature

And build our own public

Which is called human society.

And finally forget where we came from.

Nature never deceives us, it is always who deceives ourselves.
Without nature, we cannot exist.
Without nature, there is no society and no human beings.
Save our mother, save the nature
And save the earth.

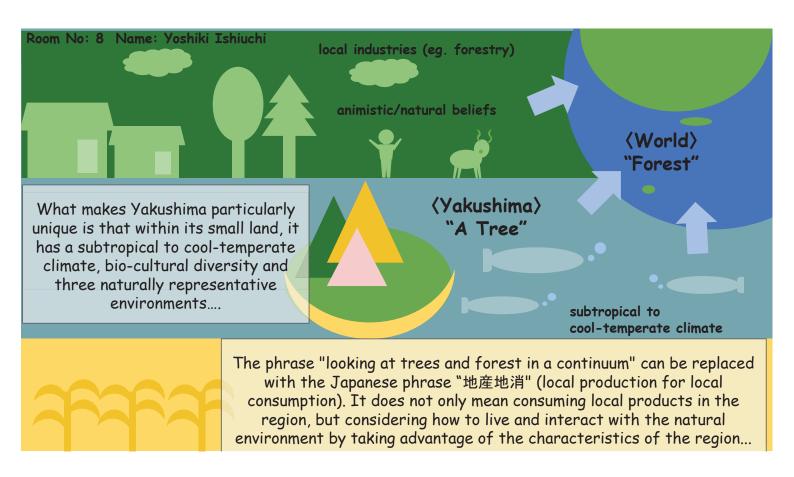


We appreciated the beauty of the forests of Yakushima from the Yakushima School. They let me feel that the nature is just like a miracle. We human beings come from nature, and build our society on the earth. But we gradually forget our source and begin to destroy nature without fear.

The purpose of this poem is to remind people of the significance of the nature and call on all the people to protect our own earth.

Name: SONG

YU



- "What makes Yakushima particularly unique is that within its small land, it has a subtropical to cool-temperate climate, bio-cultural diversity and three naturally representative environments: mountains, forests, and the sea. The insights and knowledge that we can get from these experiences from Yaksuhima (A Tree) can be utilized in other areas in the world (Forest) to achieve the SDGs Goals."
- •The phrase "looking at trees and forest in a continuum" can be replaced with the Japanese phrase "地產地消" (local production for local consumption). It does not only mean consuming local products in the region, but considering how to live and interact with the natural environment by taking advantage of the characteristics of the region. Considering the SDGs, they have a message that people can work together to tackle the common enemy, climate change, and that the biggest goal is not to end people's lives, as represented by the word "sustainable". I just don't think that's enough. What will be important for us through the SDGs, and in the post-SDGs, will depend on how we portray the stories of our diverse communities, as well as not only the endangerment of human life.



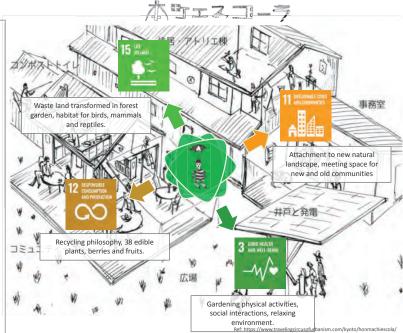
Yakushima learnings Insight Note Porte Leo

Escola

SDG Perspectives on a Kyoto Community Space

- Importance of nature
 Able to attract a wide range of people
 (artist, wood worker, writer) outsiders.
- 2. Nature being a bridge between the **new** and **old communities** (workshops, festival, research, work).
- 3. **Takuya-san** emphasized **local pride** and **transgenerational vision** to ensure a continuum.
- . **Boundaries** strong with aging neighbors and acceptation of project slow. But greening of open space creates a place to dialogue and care about **together**.

2015 2020



Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University



Yakushima learnings Insight Note Porte Leo

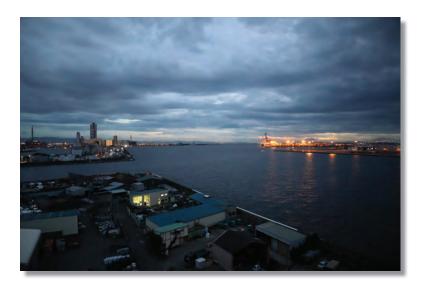
Escola

SDG Perspectives on a Kyoto Community Space



Ref: https://www.travelingcircusofurbanism.com/kyoto/honmachiescola/
Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University

Room No.1 Name: Kantaro Nishikawa



Osaka Boundary

taken from Konohana Ōhashi on 2020 Sep. 12th

Osaka. I've lived in this city almost my entire life. This city is very different from Yakushima. Osaka has a very busy atmosphere and almost no natural creatures dwell there. Yakushima, on the other hand, has a peaceful and relaxing atmosphere, and many wild creatures can be seen roaming around the region.

After learning about the beautiful boundary in Yakushima where pure water pours into the sea, I could not help checking the boundary between the city and sea in Osaka. I then packed three bottles of water and ran out of my apartment.

I decided to do this trip without releasing any carbon dioxide, just like in Yakushima. I rushed down the stairs and took my bicycle instead of a car or a train, even though the bay was more than 10 km away. I biked along the Yodo-River, and the entire time I saw lots of concrete, in addition to

"inorganic" machines that were fixing the river side or other roads.

It was getting dark, and I finally reached the point where I could see the boundary. There were no such colors as shining green or dancing blue. Everything was grey and, frankly, sad.

Before learning about the boundary, the circle of water, and Yakushima's life, lights, and nature, this view was just an ordinary scene in Osaka and had no meaning.

But now, this view appeals to me more than it ever has

We could not go to Yakushima, feel and touch the beauty of nature and have special lectures face to face due to corona virus. However, there is a upside of online lectures and one of them is that "we can easily compare between Yakushima and where we live".

As I mentioned in i-poster, I have lived in Osaka city almost my entire life. After watching beautiful nature and boundary in Yakushima, when I looked out of the window, all I saw was a grey buildings and I wondered what the boundary in Osaka city like. That is why I created my i-poster.

Room No: 7 Name: MAGERO EILEEN

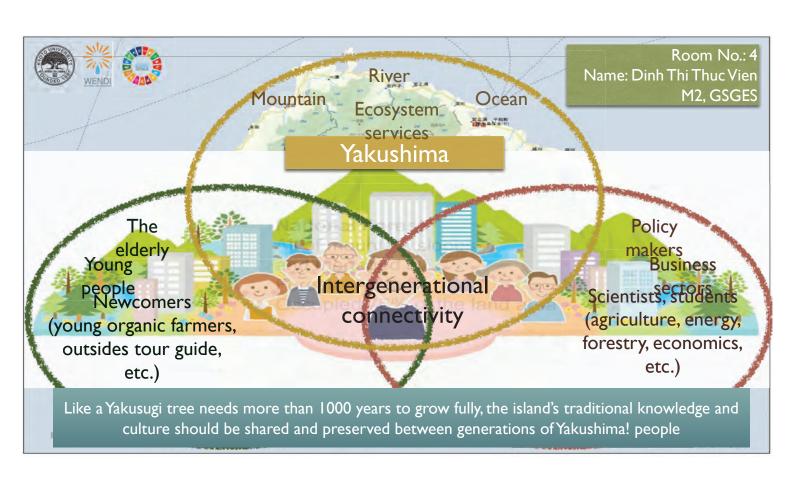
My hope in sustainability has been instigated by the insights that I've gained during the UNESCO SDGs Yakushima Online School, which was well summarized as "We are all children of the earth". The knowledge, art, photography, scent, and music shared of Yakushima, illustrated that a balance between different ecosystems can be achieved by taking down the walls and analyzing the gaps that arise due to varying demands, conflict, and competition amongst the existing species, ecological services, local residents and tourists etc.

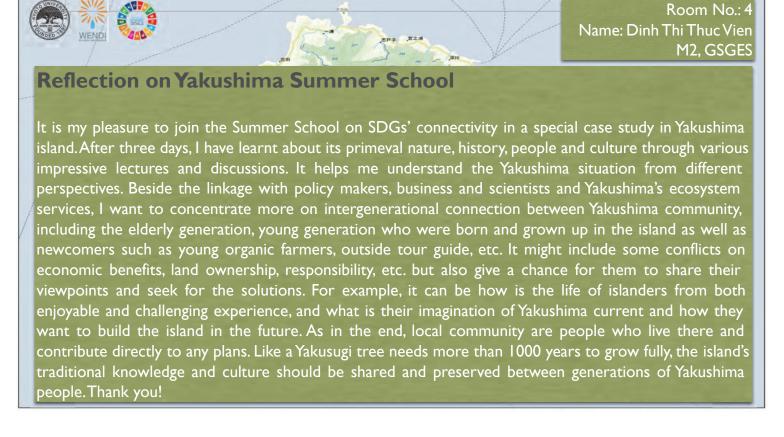


"We will find balance if we live in harmony with nature."

I am passionate in playing my role towards the achievement of SDG goal 6 which aims to "ensure availability and sustainable management of water and sanitation to all." I aim to do this through assisting in SMART governance by highlighting the missing links and gaps in the guidelines of achieving this SDG through policies under the water sector in Kenya such as misaligned development goals, generational gaps, lack of collaboration between local residents and government; and by collaborating in establishing practical ways to connect the other SDGS and link reality to the dream i.e achievement of SDGs.

- Dialogue (対話) and Collaboration- We need to face reality and discuss a topic in context and with deliberation even if we don't like it, we can still listen, put our differences aside and work together to produce a practical solution.
- Resilience and Adaptability- There exists different gaps that could create conflict, as we strive towards the achievement of SDGs, however, like the Yakusugi forest and people in Yakushima Island, we can utilize natural resources for ecological services and still protect the ecosystem. For example, New Forestry Management approach governing logging in Yakushima.
- □ Catching moments through creative works- The hope that the SDGs would be achieved was depicted in the balance and tranquility present in the music, photography, literature, and scent of Yakushima. End of the water journey (where the land and sea meet) was calm and peaceful to show the nature of sustainable life.



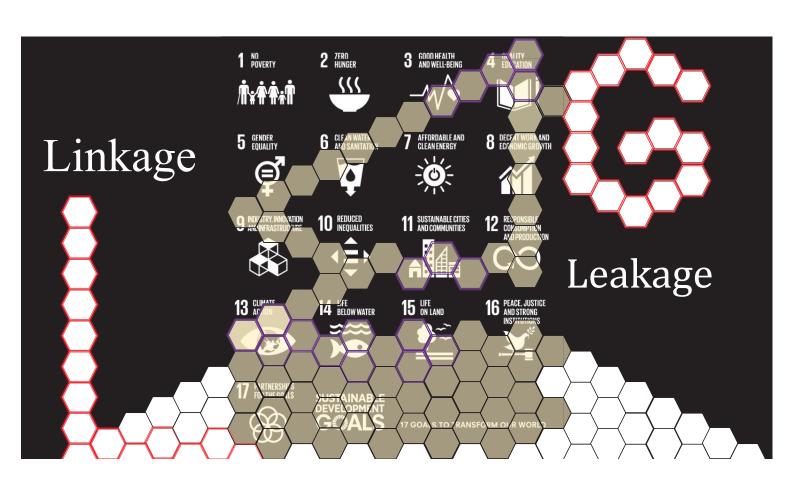


6. 協働ワークのSDGsアウトプット

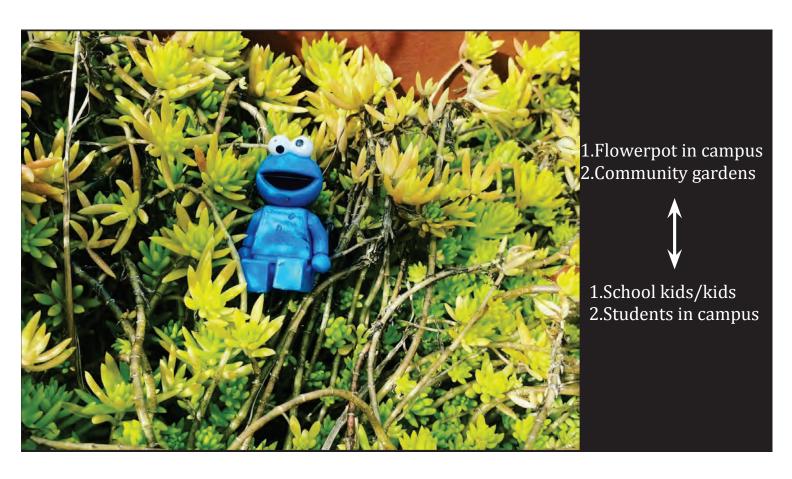
どこからどこまで

From Where To Where

Kyoto University
2021.01.21
PRESENTERS
MAGERO EILEEN
TONG LING











THE WHISPER OF THE FORESTS SUMMER PROGRAM

EDUCATIONAL PROGRAM FOR KYOTO UNIVERSITY STUDENTS

SOCIAL ISSUE

- The principal focus is SDG 4 and its interaction with SDG 8. And what the most important is the linkage among each goal.
- Under the pillars of SDG 4, the education about Yakushima is limited to doctoral knowledge only. Engagement of students over a long program can benefit the creation of knowledge about Yakushima to people not aware of the forest ecosystem, and protection of nature. This activity will also achieve awareness for SDGs 14&15.
- The geography of Yakushima is very segregated from Japan, and hence people only know for the UNESCO status. Local knowledge of the Yakushima island is not presented to people outside.
- The education project will look to engage Kyoto University students across multiple disciplines (including foreigners) to the people of Yakushima.





SDGs 8 and 9. Thus, the intermediaries in the flowchart, SDGs 14 and 15, makes us realize that protection of nature can not only be beneficial for the environment, but can also provide impetus for economic development.

Educational Action Plan: Beyond Yakushima boundary

Actionable Idea:

To design an intensive educational program about Yakushima island for university students to foster their interest to natural conservation and humanity connectivity

Program contents:

- Basic Academic ideas of Sustainability.
- A specific internship in Yakushima.
- Identify its current problems and suggest the hands-on solutions.



Overview of the Summer Program











Academic Module

August 8th - August 20th

Learn about history, culture, and nature of Yakushima

Internship

August 23rd - September 3rd

Build a business plan with the local communities that can lead to betterment of Yakushima economy.

Break

September 4th -September 7th

Enjoy beautiful Yakushima

Project Based Learning

September 8th- September 20th

Develop a business project plan in a team of two to three students and present at the end of the program

Academic Module

In the first 12 days at Yakushima, the participants w ill learn about history, culture, nature, and econo my of Yakushima.

The academic module consists of both training mod ules and field learning. The classes will be taught by Kyoto University professors and local experts. The program will be knowledge-based, and each module will be a three+three hour course designed by us, with the professors for smooth approach to teaching and pedagogy.

01	History	Brief history of Yakushima Site visit at Yakushima environmental cultural village center
02	Culture	Unique cultures of each regions Yakushima iron chef (cooking local food) Volunteering at dragon race festival
03	Nature	Nature management & resilience Marine and mountain lives at Yakushima Yakusugi hiking and Snorkeling Poetry and Fine Arts thinking Session.
04	Economy	Forest industry Corporate Business to Forest linkage Tourism industry

Internship

The participants of the program will be matched with one of the local organizations, or companies for two week internship. The participants will fill out their interest form at the beginning of the program. Through this internship, they will learn about the industry through hands on experiences. These are some of the potential partners that we are considering. The contact with the companies will be established with us, and together with them, we will modify the academic module to suit the internship training, as well. The internship will be the pillar of our program and define our idea separate from other such programs established.





YAKUSHIMA ECO FESTA

Yakushima Nature Activity Center

Yakushima Eco Festa

Project Based Learning

The participants will work in a group of two to three people with a mentor to develop a new idea to promote Yakushima to the world. They will present their project plan at the end of the program.



Step 1. Brainstorming & planning	Step 2. Pilot test	Step 3. Re-evaluation & improvement	Step 4. Pitch
Use your entrepreneurial mindset to brainstorm and plan a new idea to promote or improve Yakushima.	Run a pilot test to examine the product or idea.	Make adjustment to the product or idea to make improvements.	Share your new idea to the community! Develop the idea towards fostering conservation and economic development.

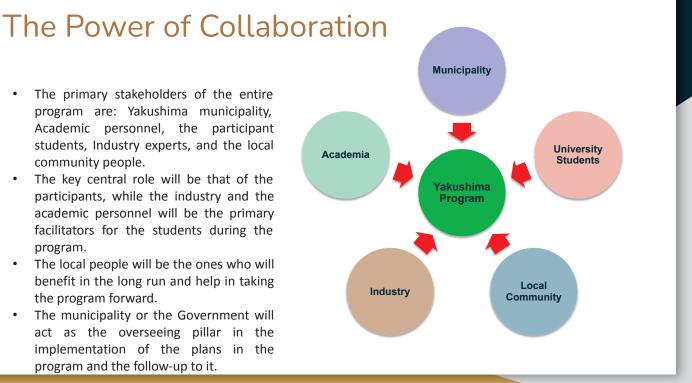
The primary stakeholders of the entire program are: Yakushima municipality, Academic personnel, the participant

students, Industry experts, and the local

The key central role will be that of the participants, while the industry and the academic personnel will be the primary facilitators for the students during the program.

community people.

- The local people will be the ones who will benefit in the long run and help in taking the program forward.
- The municipality or the Government will act as the overseeing pillar in the implementation of the plans in the program and the follow-up to it.



Educational Action Plan: Beyond Yakushima boundary

Dec 2020-Mar 2021

Apr-Jul 2021

Aug-Sep 2021

Program design

Revise contents Prepping a formal financial plan. Preparing online platform Seeking for Kyoto University's approval for the pilot project



Project Preparation

Organizing the Educational program and fixing the entire financial details of it. Stimulate the survey filled by students Managing follow-up activities. Arranging financial backing from Kyoto University, private sector, and local municipality of Yakushima.

Project Run

THE WHISPER OF THE FOREST SUMMER PROGRAM.

Insights from YAKUSHIMA SDG SCHOOL

- Thinking of nature and economics in a continuum can be really hard, and that is why the best
 experience can come directly from the lap of nature. While our program might be rigorous, the
 conduction of it, in the middle of Yakusugi and Jusugi forests, may enable brilliant minds to reflect
 the nature around them into their cutting edge ideas. That is why we call it the Whisper of the
 Forests program.
- We found that UNESCO SDG school made us think enormously about nature and SDGs, in a matter
 of just three days, that too online. Thus, getting 20 active minds into Yakushima can benefit the
 island enormously.
- Yakushima is a beautiful place, whose beauty is not known widely. That is the biggest point that we
 want to tackle and make it known.
- Preservation and conservation techniques of Yakushima are unique, and getting future
 academicians to work on Yakushima for a brief period can help spread the knowledge of the local
 communities worldwide. We believe there are many forests which are not conserved properly
 across the globe. The program can help in accelerating the knowledge-spread across various
 countries and regions.

Online Platform to Support Technical Trainees in Japan

Chaw Chaw Kay Khaing, Xu Cong, 高辻旺 英, Okamura Soyoka, Porte Leo

Background

. Technical trainees in Japan, between inadaptability and exploitation.

. 328,000 workers in 2019 (x2 in 5 years)

. Represent 22% of the non-Japanese workforce of the country

. 4,280 hiring companies

. Increasing cases of disappearance, illness, suicides.

https://www.youtube.com/watch?v=YMxlx1z6Xn4



Teaching from Yakushima: Sustainability achieved my a multitude of actors from inside and outside the island.

Our Goal: Improve the outsiders condition to improve the results of this approach on a national scale.

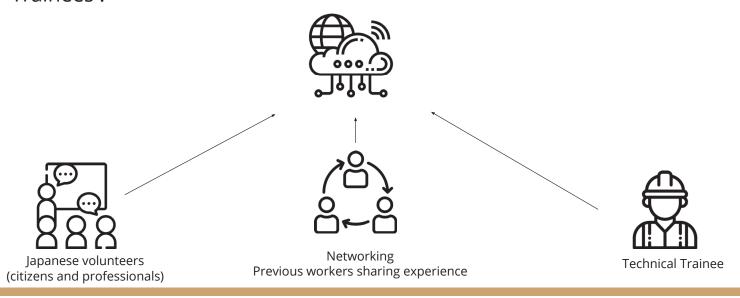
Problems revealed by interview with stakeholders

M. Fujita Chief Resilience Officer in <u>Kyoto City</u> (Kyoto International Community House) and **M. Akutsu** board of <u>Oneterrace Inc</u> (connecting foreign workers and Japanese companies).

- Language barrier still represent significant gap for the integration of foreigners. Susceptible to result in social isolation and vulnerability.
- Need of administrative support and counselling for the technical trainees unaware of their rights and opportunities.
- Lack of information regarding natural disasters prevention and the current pandemic.
- Increasing demand of support amid the covid-19 pandemic.

Our Response

Launch an Online Platform providing multiple assistance to the Technical Trainees:



Available Services for Users

- Available in multiple languages for the ease of use



Volunteer Translation/ Interpretation Services



Cultural Exchange Events



Language Learning Section



Natural disasters announces and prevention measures



Sanitary information and measures



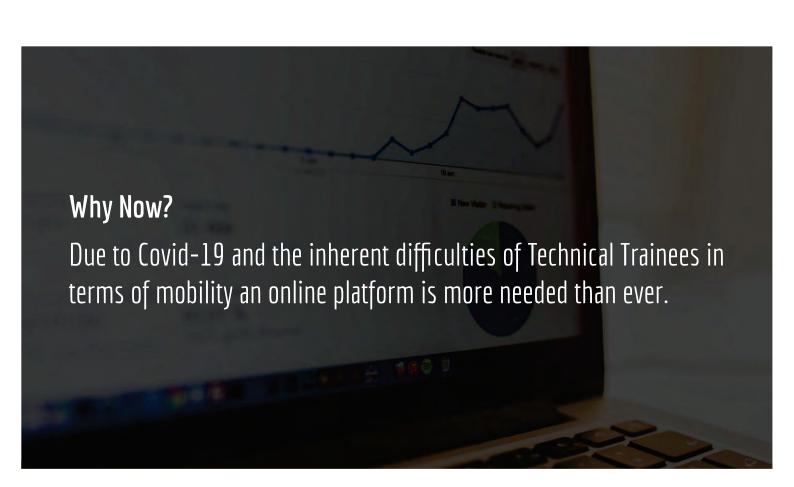
Rental Services



Job Portal and Company Reviews



Lawyer Counselling

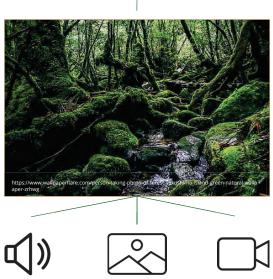


Platform Environmental Design



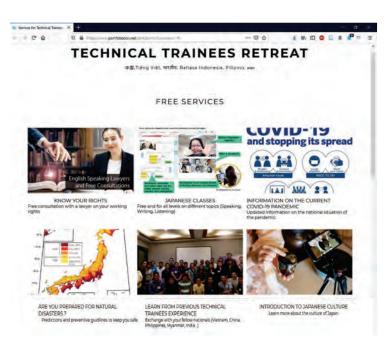
Insight from Yakushima SDGs school

- . Design the platform digital environment after Japanese natural landscapes to **provide a feeling of peace and safety**.
- . Show that through its nature can also be a sanctuary.
- . Green hosting: eco-friendly hosting of the platform servers involving green tech and renewable energies to reduce environmental impact.



Possible Model of Platform

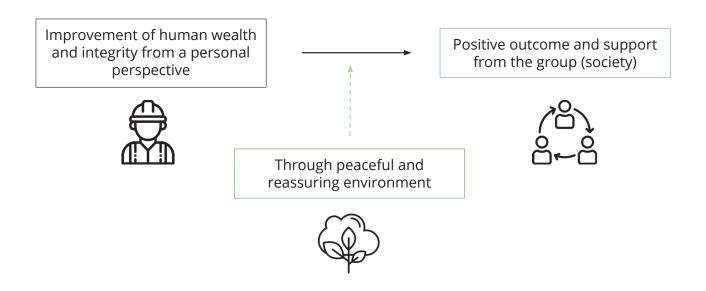








Continuum between human, society and nature



Meeting the SDGs









7. 学生達に気づきと勇気をもたら した屋久島における「木を見て森も 見る」 SDGs 思考養成実践モデル事業

小島あゆみ(サイエンスライター)

本プログラムが開催された屋久島、京都に同行し、現場で取材した立場から、本プログラムの状況、 そしてその意義について、私見を交えて報告する。

プロジェクトと多様性が鍵。プログラムのまとめとしての国際フォーラム

半年にわたる本プログラムのまとめとして開催された、2021 年 1 月 21 日の国際フォーラム。そのハイライトは学生達が屋久島を知ることで出会った社会課題を解決するプロジェクトの発表である。招聘された研究者・専門家と京大の関係者が、それぞれにアドバイスし、コメントした。

まずは、その終了後にインタビューした参加者たちの声を紹介しよう。

「学生にもパネリストの専門性にもダイバシティーがあったのがよかった。私たちのリサーチに対して、今日はインドネシア、米国、日本の多様な専門性を持った人たちにフィードバックをもらえて、たくさんの気づきを得らえた。ふだんはラボや所属する大学院の中での発表だけで、それだとスタックしてしまうこともある。また、自分たちが見つけたことを幅広い聴衆に対してシェアする、よりよい方法を身につけることができた」(フランス人大学院生)。

「英語にもともとは自信があったけれど、ここに来て、自分の英語はまだまだだと感じた。外国の人たちの話を含めて、いろんな考え方や経験、プロジェクトを聞けて、むちゃくちゃ刺激になった。自分で考えたことをシェアすることが重要で、何もしゃべらなければ、伝わらないなと。そして、考えたことをしゃべっているだけでもだめだと。プロジェクトで実際にプラットフォームを作っている人もいて、聞いたことから考えて行動に移していくのが印象的だった。びっくりした」(日本人学部生)。

「今日の発表のために、グループメンバーとインターネットを通じて何度も話し合い、アイディアやお互いの視点をシェアし、協働する機会になった。ほかの参加者たちの考えたプロジェクトにも刺激を受けたし、私たちが研究対象とした同じコミュニティーにも違うアプローチができることもわかった。アウトサイダーとしての観点からだけでなく、他の研究者、コミュニティーの人たちと一緒に課題を解決していくことの重要性も理解できた。こういったプログラムにはまた参加したい」(ケニア人大学院生)。

この日は、本プログラムを企画から引っ張った清水美香特定准教授が担当する京都大学 WENDI (UNITWIN/UNESCO Chairs Programme) レジリエンスコースの大学院生(修士課程・博士課程) たちも、そこで学んだレジリエンス思考・レジリエンスアプローチを用いて、自分が取り組む問題に焦点を当てたプロジェクト・ベースの研究を行い、その結果を発表。

専門家からのコメントとして例えば、会場で話題提供した一人である、岡田憲夫・京都大学名 誉教授は、30 年以上フィールドワークする鳥取県智頭町の小さいコミュニティーで経済を回す成 功例として酒造りの例を挙げ、学生達に何かを始める場の選び方の重要性を語って、小さな事柄 から人々を巻き込んで動かしていくとよいと助言をされていた。 この国際フォーラムは、発表者そして参加者それぞれが自分のテーマとそれに関連するヒトや モノ、事象を見直す機会となり、改めて、個と全体、個と個の繋がり、もっと大きな繋がりとほ かの繋がりの関係を考える「木を見て森も見る」思考し、その実践を構想する1日だった。

SDGs を知り、語り、実践する場として選ばれた屋久島

本プログラムは、鹿児島県の屋久島について対話し、学ぶ、2020 年 8 月の屋久島オンラインスクールから始まった。

屋久島は 1980 年に日本で初めての UNESCO のエコパーク(生物圏保存地域)の一つに登録され、 1993 年には、青森県・秋田県にまたがる白神山地とともに日本初の UNESCO の世界自然遺産に登録 された。世界自然遺産登録は、官民一体になった運動の成果だったという。

日本では5番目の大きさの島で、中心部には九州で高さ第1位の宮之浦岳(1,936 m)と第2位の 永田岳(標高1,886 m)を含む山岳地帯があり、そこには樹齢1000年を超える縄文杉がある。また、 暖かい黒潮がぶつかる海には多様な生物がいる。この豊かな自然は多くの観光客を惹きつけ、コロナ 禍前の2019年には25万人強が訪れている。

一方、2020 年 3 月現在の人口は約 1 万 2000 人(口永良部島も含む)で、6500 世帯、高齢化率 (人口に占める 65 歳以上の割合)が約 35%。人口減少が続き、インフラ整備や産業振興に悩む、日本の地方の縮図でもある。

屋久島スクールに登壇された屋久島町役場 観光まちづくり課統括係長(地域振興担当)の木原幸治さんによると、観光客の増加は島の知名度やブランド力の向上、交通インフラの利便性の向上、U ターン・I ターンの増加といった好影響がある一方、自然環境の破壊やゴミの増加、観光事業者以外への経済効果が少ない、レンタカーの増加による交通事故の危険性の増加といった悪影響もあるとのこと。

屋久島での生活の生命線である島を1周する幹線道路の一部が世界遺産に含まれ、道路の拡張がままならないため、急病人を基幹病院である屋久島徳州会病院などに搬送するのに大回りしなければならない場合もあるそうだ。

こうした魅力と課題を抱える屋久島を本プログラムの「場」に選んだ清水美香特定准教授は、本プログラムの計画の中で彼女が説く「木を見て森も見る」(『協働知創造のレジリエンス』(2015)参照)を SDG s に活かしたいと、いろいろ調べているうちに直感で屋久島をが頭に浮かんだとのこと。これまでも「森とレジリエンス」をテーマに市民参加のワークショップ等を開催してきた経験からのひらめきか。屋久島は、UNESCO、そして SDGs のプログラムとしては最適な場といえるだろう。

3日間のオンラインスクールで重要視されたのは「対話」だ。いわゆる識者が一方的に講義するのではなく、プレゼンテーションを受けて登壇者同士、登壇者と学生、屋久島の関係者らと学生が対話し、それを聞いたオンラインの参加者も対話に加わるという形が組まれた。

また、登壇者の多くは屋久島から語りかけた。

屋久島の民具の絵本などの著書がある作家の古居智子さんは、屋久島の人たちはかつて1か月を「山に10日、里に10日、海に10日」過ごしたと話した。神のテリトリーを守り、一部の地域の産物を消費しすぎない、まさにエコな生き方だ。

また、東京工業大学 リーダーシップ教育院 リーダーシップ教育院・リベラルアーツ研究教育院の中野民夫教授は、屋久島の水の循環について語り、変わりやすい屋久島の気象や、ペットボトルは船で鹿児島県内の処理施設に運ばれることを紹介した(そして、中野教授は、自作曲3曲「雨の森を歩こう」「水の旅の終わり」「カミングバックトゥライフ」をギターで弾きながら披露。大好評)。



話題に上ったのは、自然、社会、歴史、産業など、すべて SDGs に関連する、多岐に渡るテーマ。 登壇者の提供する情報、そしてその後の対話は、観光で訪れただけでは決して聞けない内容だった。

2日半、それに触れた学生達は、それぞれが考え、感じたことを iposter にまとめられ、公表されている

そして、当初、屋久島に行くメンバーとして選ばれた(実際にはコロナ禍で行けなかった)21名が京大・清風荘でのワークショップに臨んだ。





対面そして選ばれた「場」だからこそ促進される対話とワークショップ

ワークショップの成否を握るのは、「問い」「ファシリテーション」「メンバー」「ツール」などである。中でも重要なのは「場」だ。どこで何時に行うかは特に参加者の心理に大きな影響を与える。

今回のワークショップで選ばれた「場」は、京大が所有する重要文化財、清風荘。1732年(享保 17年)頃に建築され、第14代総理大臣の西園寺公望が所有後、1910年(明治43)年から5年かけて改造増築させた。ここが選ばれた大きな理由は、西園寺が最も愛した1階の4畳半の和室の天井に屋久杉が使われていることだ。

夏の暑さの中、参加者はこれから茶事が始まるかのように、小さな庭を通っていく。そして、コロナ対策もあって、すべての戸を開け放した広間にたどり着く。

オンラインで見た屋久島の森で育ち、伐採され、木材になった屋久杉の天井。船で京都まで運ばれ、大工の棟梁が選別し、素晴らしい腕を持つ大工が天井に張り、多くの人がその天井を愛で、その下で語り、さまざまな人が手入れをしてと、始まりからは何百年の歴史がそこに詰まっている。その事実のもとで SDGs について語っている学生達。贅沢な時間だ。特に留学生には特に今までにない経験となったことだろう。

とはいえ、学生達はのんびりもしていられない。初めて会うメンバー間で、屋久島で知った社会課題をどう解決すべきかを討議しながら、コミュニケーションのしかたにも試行錯誤していた。英語での討論に慣れていない学生もいれば、自らの意見を持ち、主張が強い留学生もいる。

「まだ生まれてきていない子どもたちの権利」について語っていたインドからの留学生の話が印象的だった。まさに「将来とは誰のものなのか」「将来を作るのは誰なのか」を思い知らされる。SDGs というテーマが包含する、大切な視点だ。

朝から始まったプログラムは各グループの発表を終えて終了。リアルな対話の楽しさ、有益性、ありがたさを改めて感じる日となった。









本プログラムでの「学際」と参加者の多様性

このプログラムは、SDGs 達成の担い手育成(ESD)推進事業として採択され、実施された。文部科学省のいう「SDGs 達成の担い手育成(ESD)」とは何か、また「SDGs 達成の担い手」とはどんな人物像か。

もともと ESD (Education for Sustainable Development) は「持続可能な開発のための教育」とされ、SDGs よりも先に作られた概念ではあるが、ここでは事業の標題通り、SDGs 達成の担い手育成 = ESD とする。

文科省の資料によると、ESDとは、環境、貧困、人権、平和、開発といったさまざまな現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組む(think globally, act locally)ことにより、それらの課題の解決に繋がる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動とされる。ESDは、持続可能な社会の創り手の育成を通じ、SDGsのすべてのゴールの実現に寄与する。そして、この持続可能な社会の創り手を育むためには、国際理解、環境、文化多様性、人権、平和等の個別分野を持続可能な開発の観点から統合した分野横断的な教育が必要というわけだ。

この趣旨に添い、本プログラムには、さまざまな専門分野を持つ研究者が多数参加した。

京大が世界に誇る霊長類研究所の湯本貴和所長は屋久島に居住した経験もある生態学の研究者で、 島に住む人と研究者が横断的に共に学び合う屋久島学ソサエティーの会長でもあることから、今回の プログラムの作成や実施にも尽力された。

3日間のオンラインスクールの2日目のテーマは、「Grasping Details through Relationships/関係性から詳細を捉える」で、屋久島の自然そして社会との繋がりのセッションでは、湯本所長のほか、京大から農学研究科 森林科学専攻 森林管理学講座の神崎 護教授が森林について、大学院総合生存学館 地球惑星水資源評価研究室の山敷庸亮教授が魚類について、屋久島にある野生動物研究センターの杉浦秀樹准教授がシカやサルなどの動物について解説され、企画者側である大学院 総合生存学館の實 馨教授も対話に参加された。

前述の東京工業大学の中野教授は、ワークショップ、ファシリテーション、アクティブラーニング、自然体験型環境教育を専門とし、屋久島の「本然庵」庵主として多世代に対してリトリートを実施している。

また、国際フォーラムには、会場で上記の岡田教授や山敷教授のほか、京大防災研究所と Institute for Advanced Sustainability Studies(米国)で研究する Ilan Chabay 教授、Indonesian Institute of Sciences の Enny Sudarmonowati 博士、オンラインで神崎教授、UNESCO Jakarta Office の菅原愛博士、JX 金属の菅原静郎氏、国連大学サステイナビリティ高等研究所(UNU-IAS) ESD プログラムの野口扶美子博士、英国 Northumbria University の Tong Vincent 准教授が参加。

さらに、上述のように、町役場職員、観光ガイド、作家といった方々、そしてこのプログラムの Narrative Visual Booklet の撮影を担当された美術家の山口和也さんもウェブカメラの前で語られた。 みなさん、屋久島やさまざまな土地で気象や生物、歴史、人の動きをいつも感じている方たちである。

清水特定准教授は、話者やワークショップの参加者の選定にあたり、特にジェンダーバランスに留意されていたように思う。ジェンダーバランスは SDGs や ESD には欠かせない要件だ。

参加した学生の国籍、専攻もバラエティーに富んでいた。清風荘に来た 21 名のうち、日本人学生は 約半数。ワークショップでは国籍や専攻、ジェンダーのバランスをなるべく考慮してグループ分けを 行った。

冒頭の学生達のコメントからもわかるように、学生達は多様な人々の多様な考えに接することで大きな刺激を受けていた。

限られた時間でプログラムの内容や参加者にどのくらい多様性を目指すのか、そのバランスには企画側は苦慮されたことだろう。また、2020年度はコロナ禍が進行中であって、コロナ禍そのものはテーマとはならなかったが、来年度以降は、コロナ禍がもたらした変化を見るプログラムも実施できるのではないだろうか(今年度と同じく、屋久島を場とすると比較できるのではないか)。

コロナ禍でのオンラインプログラムのありよう

今回の取り組みは、結果的にオンライン(あるいはリアルとのハイブリッド)の大学の教育プログラムとして行われた。選抜された学生・院生 23 名が屋久島の 2 泊 3 日のリトリートがオンライン実施と決まったのは約 1 か月前だった。

屋久島のリアルをどう感じてもらうのか。人々の生の声を聞き、景色を見て、SDGs を考える・実践するというプログラムの趣旨を貫くために、清水特定准教授らは屋久島に拠点を置き、そこに屋久島の人たちに来てもらい、京大内に設けた拠点とつなぐことに決めた。8月の下見の時期には、屋久島で初の新型コロナウイルス感染症の感染者が出たこともあり、京都からスタッフが来ることを地元の人たちがどう感じるのかという不安やためらいもあった。

知らない土地での、安定したインターネット環境が保証される拠点探しは簡単ではない。杉の香りが漂う屋久島町役場の新庁舎(2019 年開庁)も候補に挙がったが、外部とのインターネット接続回線が1本という「自治体あるある」で使えず、数名の方達の推薦で屋久島環境文化村センターに決まった。そして、同センターの開館時間や登壇者の予定に合わせたプログラム作成が始まった。

結果として、同センターと京都、また、屋久島の製材所、横浜の企業と学生達の自宅のインターネットの中継は大きなトラブルがなく進行した。必要な機材の知識、スタッフのコミュニケーション用のチャットを用意しておくなどのノウハウも得られた。この蓄積は、国際フォーラムの運営にも引き継がれた。

屋久島で実際に「木を見て森も見て」、「木を見て森も見る」思考を体感するはずだった学生達は、バーチャルとリアルの組み合わせでその経験をすることができたであろう。

もう一つ、屋久島スクールがオンラインになったために、予定よりも **50** 名ほど多い学生が参加できたというメリットもあった。

プログラム期間中、事務局としての役目を果たしながら、オンラインスクールの 3 日間と京都・清風荘で一部の英訳を担当した 2 人の大学院生の集中力にも頭が下がった。

なお、観光ガイドで屋久島エコフェスタ代表理事でもある田平拓也さんがオンラインスクールの開始前に学生達のために未生杉と杉の木片や木屑を布袋とともに送ってくださり、清水特定准教授の研究室の前に置かれた木片を学生達は持って帰っていた。本来であれば屋久島の製材所でその香りを嗅ぐことができたであろう、しかし実際には行けなかった学生達に素晴らしいプレゼントとなった。オンラインスクール内でも田平さんが木片をこすると香りが強くなることを紹介された。オンラインの授業やプログラムの視覚と聴覚以外の感覚を伝える、よい例だと感じた。

ESD の継続と新たな展開への期待

本プログラムは、多様な経験や専門性を持つ人を集め、情報交換や対話を促す場を作り、研究の機会を与え、思考や行動につなげる、視野の広い、深いプログラムとなった。大学における ESD の一つの例として、今後の他のプログラムの参考になるだろう。

一方で、SDGs そのものは誰もにメンタルモデルや行動変容を求めている。これはとても難しい。情報や知識だけで行動が変わるものではない。気候変動やプラスチックごみの問題を見ると、明らかである。

それゆえに、ESD そのもの、SDGs 達成の担い手育成を「持続可能」にしなければならない。教育の効果はすぐには出ない。京都大学あるいは UNESCO が、今回参加した学生達が継続して ESD を受けられる機会を作ってくださることを願っている。

また、このプログラムでは学生達が自ら課題解決のプロジェクトを考えるところまで進んだが、ぜひ京都や屋久島、また学生達の地元などの自治体、企業、市民グループと京都大学が連携して、さらなるプロジェクト・ベースド・ラーニング(PBL)の機会を設けてほしい。本格的なPBLの経験は参加する学生を大きく育てるはずだ。そして、もしほんとうに課題解決に近づけたら、それは素晴らしい成果となる。

そして最後に。本プログラムのときどきに伴走させていただいたこと、そして、この原稿を書くことを通して、SDGs や人材育成、屋久島について大いに学ばせていただいたのは他ならぬ私自身であった。多くの魅力的な人達にお会いでき、私の視野や思考が広がったことを感謝したい。「木を見て森も見る」。これからも噛みしめていく言葉だ。

8.SDGs School in Yakushima を通して

高辻旺英(京都大学農学部1回生)

視点と発見を求めて

環境問題に興味があり、新しい視点や発見を求めて今回のプログラムに参加した。まず驚いたのが、思っていた以上に多くの国々から様々な背景を持つ人々が参加していたということだ。日本人だけでなく、インドや中国といったアジアの国々、アフリカやヨーロッパからの参加者もいた。Zoom のブレイクアウトルームで話し合うパートではいろんな留学生と話をし、今世界にある問題だけでなく共通の趣味で話が盛り上がり非常に楽しかった。国によって抱えている問題が異なり、グループワークの際に自分はこの問題が重要だからこれを解決したいと討論していたことが印象的だった。グループでの討論の結果、自分は自然環境の保全、回復を第一に考えていたが、グループの他のメンバーの意見が採用され、日本での外国人労働者の待遇の改善をみんなで考えた。今まで自分がほとんど注目してこなかった問題に一緒に取り組む体験は新鮮だった。グループで議論をし、オンラインのプラットフォームを作るという計画が次第に具体的に決まっていく光景は非常にわくわくした。自分だけではプラットフォームを作るという考えは浮かばなかったし、まずプラットフォームを具体化することなんてできなかった。何か案を立てたときにそれを実行する技術とチームワークの大切さをひしひしと感じ、自分も何かスキルを身につけなければならないと強く感じた。

気づきとこれから

今回のプログラムで多くの発見を得た。なによりも全てのプログラムが英語で行われ自分も英語で意見を述べるという経験をして自分の英語でのコミュニケーション能力に自信を得たが、同時にまだまだ深い議論をするためには語彙力が不足していると気づかされた。また、経験の不足も感じた。海外旅行をし、カンボジアの貧しい村で働く子供や地雷の現状などを見て十分良い経験をしたと思っていたが、いざアジアの貧しい村の出身者の学生の話を聞くとまだまだ自分の知らないことがあったと気づかされた。これらの気づきを得られたので参加できたことにとても満足している。今はプログラムを通じて仲良くなった留学生に出身国の事情を教えてもらいつつ、旅や他のプログラムを通じて経験を積んでいこうと考えている。

9.ユネスコ屋久島プログラムに参加して

齊藤ゆずか(京都大学文学部1回生)

木を見て森も見ること

「屋久島」の文字が京都大学の HP のイベント紹介欄に現れたとき、私の胸は高鳴った。北国の地方都市出身の私には、まったく異なる環境の屋久島に身を置き、そこで多くの留学生たちと英語で議論ができるプログラムは、魅力的でしかなかった。1 回生で、海外経験も英語力もないことに不安はあったものの、稀有な体験を求めて申し込んだ。

この時の私は、「木を見て森も見る」というタイトルの意味をほとんど理解していなかった。

プログラムはオンラインでの開催になった。現地に行けないことは残念だったが、写真家の方が作成された動画を見たり、現地で開催されている森の中での音楽会やヨガなどのイベントを知ったり、世界遺産の領域に存在する人間の生活の痕跡について説明を受けたりしたことが特に印象に残っている。今までの私は屋久島を「森」として見ていた。太古から残る自然、悠久の自然、そのような形容詞で屋久島を捉えていたとき、私の頭の中からは、そこに暮らす人々の存在が抜け落ちていた。実際には屋久島には人を含めたくさんの生き物が暮らしていて、田や畑、林業、芸術、観光などの人の営みによってわずかながらも常に姿を変えている。そのわずかな差に着目し、屋久島が示唆する可能性に気が付くこと。それが「木」を見ることになるのではないかと私は考える。

アートを感じる

清風荘で行われた対面プログラムでは、屋久島を舞台にしたワークショップから私が得た示唆のひとつ、「五感を使って"アート"を感じること」が実践できた。地域で脈々と受け継がれる文化や、守られてきた自然は、外からやって来た人々にとってこの上ない芸術に感じられるのだ。清風荘の床に座り、目を閉じてみる。鳥の囀りの、澄みわたった響きに磨きがかかる。木の葉が風に揺れる、そのリズムが私の呼吸を作る。ここにいつか座っていただろう西園寺公望は、いったい何を感じただろうか。想像する。心が豊かな彩りで満ちて、新しいものを生み出したくなる。考えたい。話したい。

そこで初めて私は、自分の英語力と向き合わねばならなくなったのである。周りの先輩や留学生の話を理解するのが精いっぱいで、自分の意見をなかなか言えない。自分の前に透明な壁があるような感じがした。ここを乗り越えなければ、今回のプログラムに参加した意味がないだろう。そう思って自分の意見を求められた際にはなんとか話をするようにしたが、自分が思ったような貢献はできなかった。

協働を通して

チームで考えたスタディプログラムを発表するリハーサルでは、具体性の不足を先生から指摘された。チームのメンバーは集まることが難しい状況の中で、なんとか修正を重ねて、発表に至った。異なる背景を持つ人々の共同作業が形になった。屋久島が結び付けてくれたのだ。

私は屋久島から異なるものが交じり合うことがもつ豊かさを学び、プログラムを通してその難しさと自分の中にある課題を自覚した。もしいつか屋久島に、その地に立つことができるのであれば、歩き回り、人と話し、自己と対話し、全身で風を感じて流れてくる音に耳を澄ましながら、自分の中にあるものを存分に表現していきたい。

10.気づきの思弁と花弁

土田 亮(京都大学総合生存学館博士課程)

気づきの思弁

唐突な独白から始まるが、我々人間は気づきがあって思考や行動様式を変容することができる 生き物だと考える。それは昨今の新型コロナウイルスが最たる例として挙げることができよう。 これまでいくつ思考・行動のパラダイムシフトがあっただろうか。ニューノーマル、ソーシャル ディスタンス、オンラインミーティングなど……枚挙にいとまがない。その適応にもしばらく手 こずったものである。さらに言えば、我々人間はどうしても気づきにくい生き物であるというこ とも思い知らされてきた。経験則的に学習し内省の時間を置くことで、我々ははじめて新たな思 考・行動の地平に立つことができる。文字通り、我々は日常に埋め込まれた変化を気に留めるこ とができる。

とはいえ、果たして来る思考や行動様式の変容に対して、前もって気づいていて我々が十分に 思弁することができただろうか。それが十分にできていたならば、どれだけ私たち人間社会は豊 かだっただろうか。いや、前もって気づくことなどできやしないし、容易ではない。逆に言い換 えれば、いまここに切り開かれていく世界だからこそ、思考と行動様式が変容する過程の中で見 落としていた、あるいはそもそも等閑視していた人間と社会と自然の間に隙間があることに気づ き、どのようにすればその隙間をデザインすることができるか思案し、提案できる余地はまだま だあるのだ。



Photo by 土田亮

隙間に気づく、隙間をデザインということ

じゃあどうやってその隙間に気づき、デザインする実践に繋げることができるだろうか。

今回の SDGs 達成の担い手育成の一環として行われた UNESCO SDGs スクール in 屋久島は、運営として携わった私にとって多くの気づきがあった。そのうち主要なもの 2 つを紹介したい。

第1に、新型コロナウイルスの猛威に見舞われ、本来屋久島で実施する予定をやむなくオンライン形式に変更を余儀なくされたことを踏まえて得た気づきである。特に新しく大学・大学院に入った学生にとって、多様な人たちとの出会いが少なく繋がりがつくれていないこと、すでに在学している学生にとっては授業のほとんどがオンラインに切り変わり、立て続けに非対面コミュニケーションを要求されその閉塞感に辟易していたことが事前参加フォームから読み取れた。その期待にすべて応えることは難しかったが、「木を見て森も見る」ことをオンラインであっても体感してもらおうと、オンライン版のプログラムが再構築された。特に、オンラインに切り替えた際プレゼンテーションで一方的な発表に傾倒するのではなく、屋久島の自然や社会のありようを盛り込んだ映像や現地の人の語り、現地の木材製造工場からいただいたスギ材の切屑が入った匂い袋や現地の写真を織り込んだ地図の配布、インタラクティブ性を仕掛けるチャット機能などを通して伝わるように工夫を施した。それらを通して生まれる対話を重視した。より言えば、対話を通して普段は気づかなかった、自然や社会、人間の間に埋め込まれている問題を丁寧に解きほぐし、その問題にはどのような繋がりがあるのかを1人であるいは複数人で考え、それぞれがプロットを描くことができた、といえばよいのだろうか。これは問題に気づくまなざしを育てることができたと言えよう。

第 2 に、担い手にとって SDGs や ESD とは何かを起点にして、何をもってゴールやコンセプトの達成の成功だと言えるのかといった点の気づきである。本来、SDGs の各目標は別個に存在するわけではなく、相互に繋がっている。そこに自然界と人間社会の複層性が宿されている。複層性の中に孕んでいる課題群は、人間社会の活動に起因するとともに、あらゆるこれらの時間スケールや空間に影響をもたらし得る。こうした文脈から見る「持続可能性」あるいは「開発」は、誰にとっていつまで、どこまでのものかを含めて見直す必要性に繋がる。つまり、現場の人々を中心に据えて、それに繋がる人間活動、さらには自然界との関係性を、あらゆる時空間とスケールから見つめ直す必要があると私は考える。UNESCO SDGs スクール in 屋久島では、オンラインであっても人の出会いがあり、グループでの交わりがあり、ワークショップを通して協働する機会が設けられた。それらを通して多種多様な価値観や背景を共有する場面が多く見られた。そうした気づきこそが自分のこれまで育った環境や専攻などに由来する固定観念や価値観を揺らがせることになる。ゆえに、持続可能性や開発の言葉やあり方の根本を考え直し、より身近な人間社会、自然のスケールあるいは境界線の捉え方も静かに考えることができよう。これは気づきを内側の力で深め、まなざしを共有することができたのではないだろうか。

気づきの花弁

さて、これまでに見たように隙間から気づきを萌芽させていくこと、そして花を開かせ、結実させていくことのヒントは、非常にありきたりであることを承知で言うならば、「気づくことに気づく」ということに尽きるのだと思う。冒頭に述べたように、どうしても我々は何か気づいていることに蓋をしがちであるし、前もって気づくこともそう簡単にはできない。しかし、気づきの種や芽はどこにでもある。それらの存在に気づき、自分ごとになり、共有する人たちと協働することが木を見て森も見るための一歩目ではないか。

このプログラムを通して、多くの気づきをもち、社会の変容を方向づけるきっかけとなれば、それは望外の喜びである。改めて、本事業に関わった全ての人たち、学生、ご協力いただいた先生の皆様に感謝を申し上げたい。

Acknowledgement 謝辞

Thank all of you to support and engage in this project.

- Primate Research Institute, Kyoto University Director/Society of Yakushimaology President, Prof. Takakazu Yumoto 京都大学霊長類研究所所長 / 屋久島学ソサエティ会長 湯本貴和教授
- ・Yakushima Eco Festa Director, Takuya Tabira 屋久島エコフェスタ代表理事 田平拓也さん
- ・Yakushima Town, Sightseeing and Town Planning Section Chief, Koji Kihara 屋久島町役場 観光まちづくり課統括係長(地域振興担当) 木原幸治さん
- ・Ynac President, Takeshi Matsumoto (有)屋久島野外活動総合センター代表取締役 松本毅さん
- Director of Ynac, Hiroshi, Ohara
 (有)屋久島野外活動総合センター 取締役営業部長 小原比呂志さん
- · GSAIS, Prof. Yosuke Yamashiki 総合生存学館 山敷庸亮教授
- Graduate School of Agriculture, Prof. Mamoru Kanzaki 農学研究科 神崎護教授
- ・Wildlife Research Center Assoc. Prof. Hideki Sugiuwa 野生動物センター 杉浦秀樹准教授
- Author, Tomoko Furui作家、古居智子さん
- ・Channel Original Inc. President, Hidenobu leyama チャネルオリジナル株式会社 代表取締役社長 家山英宜さん
- ・Yakushima Jisugi Processing Center, Inc. Manager, Hiroyuki Toki 株式会社屋久島地杉加工センター事業統括マネージャー 時寛之さん
- Tokyo Institute of Technology, Prof. Tamio Nakano
 東京工業大学 中野民夫教授
- ・Team Synthesis Lab. Inc. Takashi Hatta チーム・シンセシス・ラボ株式会社 代表取締役 八田孝さん
- ・GSAIS, Graduate Student, Lee Hyorim 総合生存学館 大学院生 李暁林さん
- ・Sachiko Yoshioka 吉岡佐知子さん
- ・Programme Specialist, UNESCO Jakarta Office, Ai Sugirura ユネスコジャカルタ事務所 プログラム・スペシャリスト 杉浦愛さん
- ・Indonesian Academy of Science, Visiting Professor, Graduate School of Agriculture, Kyoto University, Dr. Enny Sudarmonowati インドネシア科学院、京都大学農学研究科客員教授 Enny Sudarmonowati 博士
- ・Institute for Advanced Sustainability Studies, Potsdam, Visiting Professor, Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University ポツダム応用持続可能学研究所、京都大学防災研究所客員教授 Ilan Chabay 博士
- · Institute of Disaster Area Revitalization, Regrowth and Governance, Emeritus Professor, Kyoto University, Dr. Norio Okada 関西学院大学災害復興制度研究所、岡田憲夫京都大学名誉教授
- · JX Nippon Mining & Metals, Dr. Shizuro Sugawara
- JX 金属株式会社 取締役常務執行役員 菅原静郎さん
- ・Institute for the Advanced Study of Sustainability, United Nations University,Dr. Fumiko Noguchi 国連大学サステイナビリティ高等研究所 野口扶美子さん
- ・Northumbria University, Assoc. Prof. Vincent Tong ノーザンブリア大学 Vincent Tong 准教授

執筆: 寶馨、清水美香、小島あゆみ、土田亮、高辻旺英、齋藤ゆずか

写真: 山口和也、小島あゆみ、土田亮

デザイン: 土田亮

発行元・年:京都大学 レジリエント社会創造研究会 2021年

本冊子に関するお問い合わせ

京都大学 レジリエント社会創造研究会 shishukanresilience@gmail.com

